群馬県境除き低い放射線量

文科省 県内の航空機モニタリング結果公表

標高の高い山 越えられず

文部科学省は11日、東京電力福島第1原発事故に伴う放射性物質の拡散状況を調べるため県内全域を対象に行った航空機による放射線量のモニタリング調査の結果を公表した。佐久市や南佐久郡佐久穂町など佐久地方の群馬県境付近は周辺地域より比較的高い放射線量だったが、他地域は低かった。放射性物質の拡散状況について同省は、「群馬・長野県境に標高の高い山があるため、多くの放射性物質は（群馬側から）山を越えられなかった」とみている。

同省原子力災害対策支援本部によると、地表高さ1㍍の空間放射線量率が高かった地点（各自治体の最大数値）は、佐久市で1時間当たり0・54㍃㍉㍗、北佐久郡軽井沢町で同0・46㍃㍉㍗、佐久穂町で同0・32㍃㍉㍗などだった。これら佐久地方は原発事故の影響とみられる。

一方、比較的高い数値は大北や木曽、飯田下伊那地方などに分布することも判明したが、こうした地域について同省は「花こう岩に含まれるカリウムなどに由来する放射線の影響と考えられる」と指摘している。佐久地方の空間放射線量率はこれら天然由来のレベルとほぼ同じ。

同省は放射性セシウムの分布状況も公表。原発事故の影響がみられるとされる1万㍃㍉を超えたのは、地図上は判明しづらいが、佐久市内で1平方㌔当たり最大14万㍃㍉、佐久穂町の同11万6千㍃㍉、軽井沢町の同7万5千㍃㍉、北佐久郡御代田町の同7万1千㍃㍉、上水内郡飯綱町の同2万㍃㍉。飯綱町が比較的高く出たのは「離れた地域で高く出る場合もあり得るが、詳しい理由は分かっていない」（同支援本部）。それ以外の県内の市町村は1万㍃㍉以下だった。

モニタリング調査は、高感度の検出器を搭載した民間ヘリコプターで9月24日～10月7日に実施。得られたデータから数値を算出した。飛行困難な山岳地域は一部除外。局所的に放射線量が高い「ホットスポット」は把握できない。

文科省は長野のほか岩手、静岡、山梨、岐阜、富山県の結果も公表した。

副知事「安心して生活を」

文科省が11日公表した空間放射線量のモニタリング調査結果を受けて、加藤さゆり副知事は同日県庁で記者会見し、「健康に影響があるとは言えず、安心して通常の生活をしてほしい」と呼び掛けた。

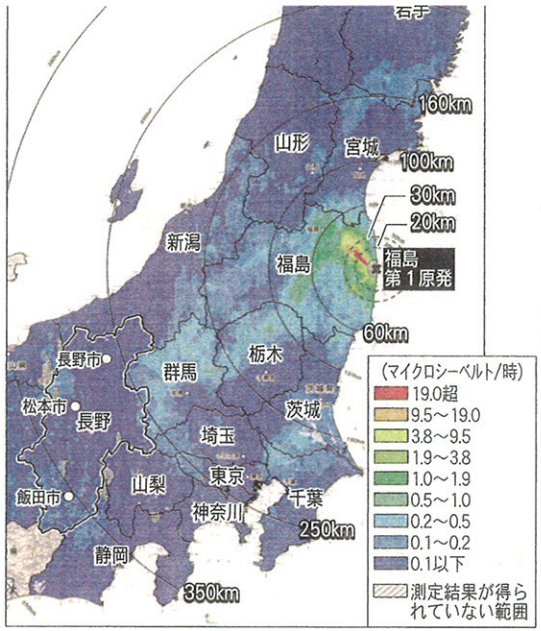
北佐久郡軽井沢町の軽井沢観光協会長、土屋芳春さん（55）は「軽井沢は観光立町。安全安心のために、データと公表は必要」と受け止めた。同町在住で放射能汚染を懸念する母親らでつくるグループ「キッズ・アース」の福士明子代表（39）は「県や町は、子どもたちが使う施設を中心にできるだけ放射線量を低減してほしい」と訴えた。

南佐久郡佐久穂町穂積の不動産業、石井吉正さん（54）は「町内に放射性物質が落ちているとは思っていなかったが、値も低く、八ケ岳側で栽培する高原野菜などへの影響は心配していない」とした。

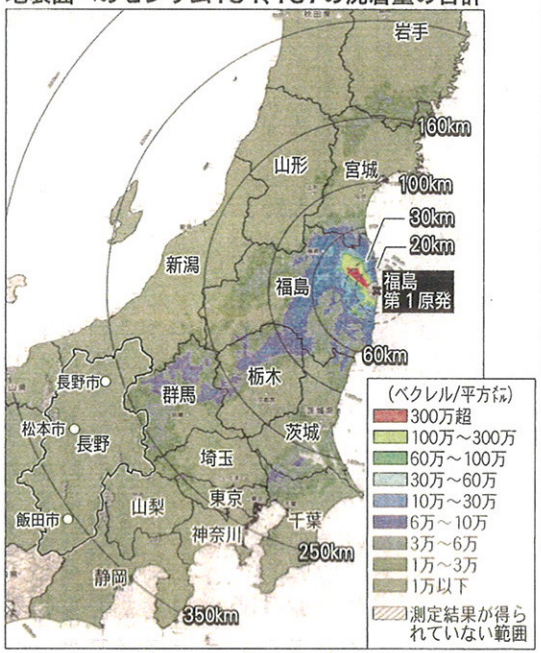
放射線測定器を3台所有する佐久市岩村田の主婦井出佳代子さん（51）は「高い値が出た、山中にあるキャンプ場など人が滞在する場所では、看板などで放射能汚染を示してほしい」と訴えた。

信州大学教育学部（長野市）の村松久和教授（核・放射化学）は、群馬県境付近については「原発事故の影響の可能性が高いが、これまで県が地上で測定してきた結果も考慮すると、健康に影響を及ぼす状況ではない」とした。北アルプスから南信地域にかけて、放射線量が周辺より高い場所があることについて「カリウム、ウランなどの放射性物質を含む花こう岩の地質分布と重なる」と説明した。

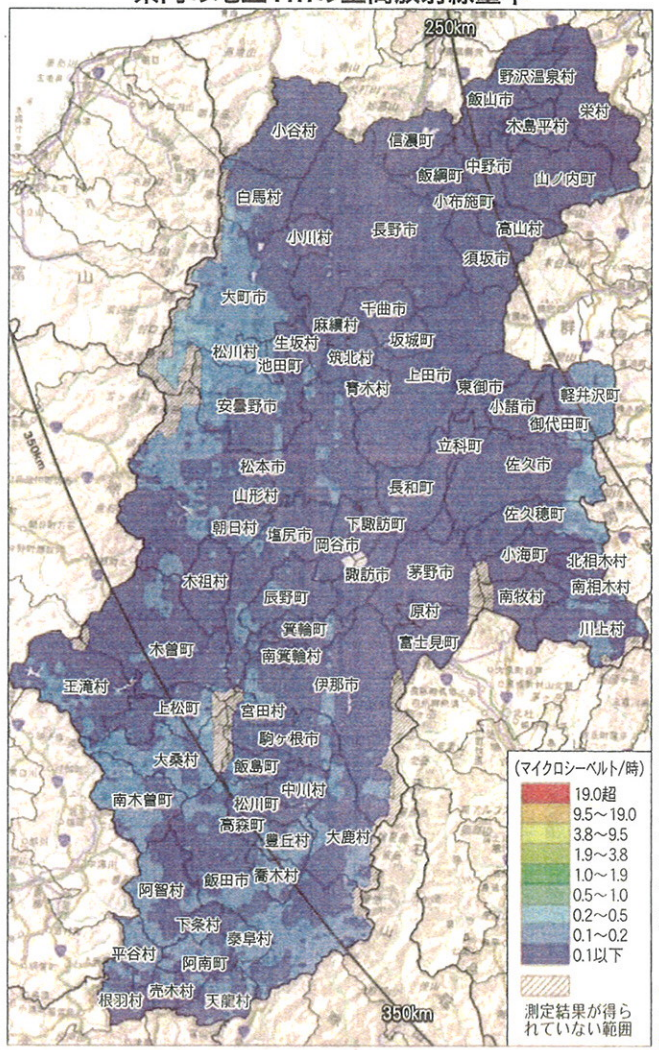
県は12、13日、佐久市、軽井沢町、佐久穂町の計41カ所で地上1㍍の空間放射線量を測定し、結果を14日に公表する方針。



地表面へのセシウム134、137の沈着量の合計



県内の地上1mの空間放射線量率



空間放射線量率は高い値を示すにつれて青色を薄く表示。群馬県境の佐久地方が高いのは原発事故の影響によるとみられる。それ以外の大北地方、木曽地方、伊那谷などが周辺より高くなっているのは天然の花こう岩から出る微量の放射線が要因とみられる